



©Adam Fenster

チーフのクリストファー・グラナータ氏。『オクタヴィア』の仕込みにて。

ロチェスターの新星たち

良いプロダクションに関わった後は、いつも幸福感に溢れています。制作期間中に問題が山積みだったとしても、それらを一緒に乗り越えた仲間と迎える初日はいつも清々しく、舞台芸術に関わっていることへの感謝の気持ちだけが残ります。ロチェスター大学でのローマ悲劇『オクタヴィア』公演も、そんな作品の一つとなりました。

演出家ケン・ロス・スクモール氏のご推薦で照明デザイナーとして参加した『オクタヴィア』のプロダクションチームは、演出家、デザイナー、そして教授で芸術監督のナイジェル・マイスティ氏ら講師陣を除くと、スタッフも出演者も大学在学中の生徒で構成されています。照明チームは4年生でチーフのクリストファー・グラナータ氏が先頭に立って、オペレーターや彼のアシスタントの生徒たちをまとめます。

私自身も渡米後に大学で舞台芸術を専攻し、学部が主宰するプロダクションで働きながらアメリカの制作技術とアメリカ人の動き方を身につけました。したがって、学舎での仕事がプロの現場と同じスピードで進まないことは、十分承知しています。しかし、ロチェスターの生徒は良い意味で私の予想を覆しました。もちろん個人差はありますが、3割ほどの生徒はニューヨークのユニオンに所属しない劇場で働く若手エレクトリシャン並みの技術を持ち合わせ、中には器材の吊り位置からデザインの意図を読み解く生徒もいて、プロ顔負けです。それもそのはず、ロチェスター大学の舞台芸術は英文学部に属しますが演劇学部というものはなく、チーフもオペレーターもほとんどの生徒がエンジニアリング専攻など理系の生徒だと聞きました。したがって、電気の取り扱いやネットワークシステムの構築、器材の扱いは彼らの専売特許です。

さらに、優秀なロチェスターの生徒を育てるもう一つの特徴は、講師陣の生徒への信頼です。その証拠に、チーフは劇場のビルの鍵も管理します。確かに、学校といえど企業として作業の安全管理などコンプライアンスの徹底が不可欠ですが、マイスティ氏は生徒たちを信じ、彼らが思う存分挑戦できる自由と場を提供していました。また、チーフの労働には報酬が与えられます。舞台芸術も学校教育も金銭だけが目的ではありませんし、なによりグラナータ氏本人の意識の高さが設営の質を上げています。しかし、報酬が彼をプロと同等に仕事し、責任感を深める重要な要素の一つとなっているようにも感じました。学業と両立しつつ、刻一刻と移り変わるプロダクションとデザイナーのニーズに応えるよう、責任者として昼夜問わず納得いくまで仕事をする彼のような若者が、アメリカ照明業界の未来を明るく照らしています。

スクモール氏が描く『オクタヴィア』像の再現において、光がどのように役に立てるか、デザイナーと生徒たちの試行錯誤は初日開幕間際まで続きました。実母と妻、そして恩師セネカを次々と殺害したローマ時代の皇帝ネロの姿は、2人の妻とパーソナル・アドバイザーのトマス・モアを処刑に追い込んだイングランド王のヘンリー8世の面影も感じさせ、オクタヴィアを支持する市民を演じるコーラスの反発は、2017年新政府誕生におけるニューヨークとワシントンDCでのプロテストを彷彿させました。スクモール氏の演出によって、人間の本质は時代を経ても大きく変わらないことを示す公演となったように思います。初日公演中、自身で仕込んでフォーカスしたライトが物語を伝えているのを見て嬉しそうにしている生徒たちの表情が、とても印象的でした。